

《アジア・アフリカ諸言語の研究》

共同研究プロジェクト報告

アジア・アフリカ文法研究
ASIAN AND AFRICAN LINGUISTICS

14

特集：文法構造
アクセント

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
(ILCAA)

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU

1985

フィンランド語の文法構造

Syntactic Structure of Finnish

松村 一 登

フィンランド語は、ウラル語族、フィン=ウゴル諸語の中のバルト=フィン諸語と呼ばれるグループに属する言語で、フィンランドの公用語であるほか、ソ連のカレリア自治共和国でも、民族語として公用語に準じる地位をあたえられている。話し手の数は約 500 万人で、そのうちの約 450 万人がフィンランド国内に住んでいる。

本稿は、1984年 2月24日の文法班の集まりで、「フィンランド語の文法構造」と題して行なった発表にもとづくものであるが、その発表の全体ではなく、統語的類型論の観点から興味をひくと思われるトピックだけをまとめたものである。発表の当日インフォーマントとして協力していただいた奥田ライヤさんに、お礼を申し上げる。

フィンランド語は、ラテン文字を用いて表記される。本稿中の用例は、必要に応じて形態素の境界がハイフンで示されていることを除けば、正書法のままである。

1. 基本的語順

平叙文の基本的語順は、「主語-動詞-目的語」である〔(1)〕が、語順は一般的にかなり自由である。たとえば、存在文（「4. 存在文と普通文」参照）の通常語順は、「存在場所-動詞-存在するもの」である〔(5a)〕し、機能的に受動文に相当する(5b)のような文では、語順は「目的語-動詞-主語」となる。

フィンランド語は、概ね後置詞言語といってよい〔(2)〕が、前置詞もある〔(5c)〕。さらに、前置詞と後置詞のいずれとして用いてもよい語もある〔(5d)〕。名詞の修飾語として用いられる名詞の属格形や形容詞は、被修飾語の前におかれる〔(3), (4)〕。

(1) Liisa rakasta-a Matti-a. [基本的語順]

リーサ(主格) 愛する(3人称単数現在) マッティ(分格)

「リーサ(女性)はマッティ(男性)を愛している」

- (2) talo-n takana/edessä [後置詞言語]
 家(属格) うしろ/まえに 「家のうしろに/まえに」
- (3) Suome-n historia [属格修飾語]
 フィンランド(属格) 歴史 「フィンランドの歴史」
- (4) suomalainen sauna [形容詞修飾語]
 フィンランドの サウナ 「フィンランドサウナ」
- (5) a) Pöytä-llä on kirja.
 机(接格) ある(3人称単数現在) 本(主格) 「机の上に本がある」
- b) Ohjelma-n on toimittanut Pekka Joki.
 番組(対格) 編集する(3人称単数現在完了) ベッカ・ヨキ
 「番組はベッカ・ヨキによって制作された」
- c) ennen joulu-a
 まえに クリスマス(分格) 「クリスマスのまえに」
- d) lähellä kirkko-a ~ kirko-n lähellä
 近くに 教会(分格) 教会(属格) 近くに 「教会の近くに」

2. 「主語」

フィンランド語は、いわゆる対格言語であると考えてよい((6a), (6b), (6c))が、フィンランド語の「主語」について論じる場合には、次のような現象にも注意をはらう必要がある。

- i) modalな意味を表わすある種の構文では、「主語」が属格であらわれる((7a), (7b), (7c)), この種の構文では、主語の人称にかかわらず述語は常に3人称単数形をとる((8)), 「属格主語」は、また一般に、non-finiteな動詞形を述語とする従属文(補文)の主語の形でもある((9a), (9b), (9c))。
- ii) 心理的、肉体的な状態(こわい, おかしい, 疲れた, ねむい, など)を表わす場合に、「分格目的語+他動詞」という非人称構文が用いられる〔(10a)〕が、この構文の分格名詞句は、「主語」的な性格が強いように思われる。たとえば、(10a)と(10b)は意味が極めて近い。

iii) 所有を表わす文（所有文）では，語順が「所有者（接格）-olla動詞-所有されるもの」となる〔(11a)〕が，この種の文では，所有者を表わす名詞句が「主語」的に感じられる。同様のことは，(11b)，(11c)のような構文についても観察される。

「主語がない」とされる文には，2つのタイプがある。1つは，非人称文である〔(12a) (12b)〕。(12c) (= (10a)) もこのカテゴリーに含めておく。非人称文の動詞は，いずれも3人称単数形である。第2のタイプは，不定人称文，ないしは一般人称文として特徴づけることのできる文である〔(13a), (13b), (13c)〕。このタイプの文の場合は，動作主が明示されていないけれども，常に人間の動作主が想定されているという特徴がある。想定されている動作主は，generic/indefiniteのことも，specific/definite のこともある。このタイプの場合，動詞は，3人称単数形または受動形（不定人称形）をとる。

(6) a) Pekka osta-a kirja-n. [対格目的語]
ベッカ(主格) 買う(3人称単数現在) 本(対格) 「ベッカは本を買う」

b) Pekka rakasta-a Liisa-a. [分格目的語]
ベッカ(主格) 愛する(3人称単数現在) リーサ(分格) 「ベッカはリーサを愛している」

c) Pekka lähte-e kaupunki-in. [自動詞文]
ベッカ(主格) 出かける(3人称単数現在) 町(入格) 「ベッカは町へ出かける」

(7) a) Peka-n täyty-y lähte-ä.
ベッカ(属格) ねばならない(3人称単数現在) 出かける(不定詞) 「ベッカは出かけなければならない」

b) Peka-n kannatta-a lähte-ä.
ベッカ(属格) するとよい(3人称単数現在) 出かける(不定詞) 「ベッカは出かけるといい」

c) Peka-n on hauska lähte-ä.
ベッカ(属格) である(3人称単数現在) 出かける(不定詞) 「ベッカは出かけるのが楽しい」

(8) Minu-n täyty-y lähte-ä.
わたし(属格) ねばならない(3人称単数現在) 出かける(不定詞) 「わたしは出かけなければならない」

(9) a) Liisa anto-i Peka-n lähte-ä.
リーサ(主格) 与える(3人称単数現在) ベッカ(属格) 出かける(不定詞)
「リーサはベッカに出かけさせた」

- b) Liisa usko-o Peka-n lähte-vä-n.
 リーサ(主格) 信じる(3人称単数現在) ベッカ(属格) 出かける(能動現在分詞対格)
 「リーサはベッカが出かけると思っている」
- c) Liisa saapu-i Peka-n lähde-tty-ä.
 リーサ(主格) 到着する(3人称単数過去) ベッカ(属格) 出かける(受動過去分詞対格)
 「リーサはベッカが出かけたあとでやってきた」
- (10) a) Pekka-a väsyttä-ä.
 ベッカ(分格) 疲れさせる(3人称単数現在) 「ベッカは疲れている」
- b) Pekka on väsy-nyt.
 ベッカ(主格) である(3人称単数現在) 疲れる(能動過去分詞) 「ベッカは疲れている」
- (11) a) Liisa-lla on lapsi.
 リーサ(接格) ある(3人称単数現在) 子供(主格) 「リーサには子供がいる」
- b) Liisa-lle synty-i lapsi.
 リーサ(向格) 生まれる(3人称単数過去) 子供(主格) 「リーサは子供が生まれた」
- c) Liisa-lta kuol-i lapsi.
 リーサ(奪格) 死ぬ(3人称単数過去) 子供(主格) 「リーサは子供が死んだ」
- (12) a) Sata-a kovasti.
 降る(3人称単数現在) 激しく 「(雨が) 激しく降っている」
- b) Täällä on lämmin-tä.
 ここで である(3人称単数現在) 暖かい(分格) 「ここは暖かい」
- c) Pekka-a väsyttä-ä. (= (10a))
 ベッカ(分格) 疲れさせる(3人称単数現在) 「ベッカは疲れている」
- (13) a) Sinne täyty-y men-nä.
 そこへ ねばならない(3人称単数現在) 行く(不定詞) 「そこへ行かなければならない」
- b) Pekka-an voi luotta-a.
 ベッカ(入格) できる(3人称単数現在) 信頼する(不定詞) 「ベッカは信頼できる」
- c) Häne-t kutsu-taan päivällise-lle.
 彼(対格) 招待する(受動現在) ディナー(向格) 「彼はディナーに招待される」

3. 「直接目的語」

前節でも述べたように、フィンランド語はいわゆる対格言語と考えることができる。すなわち、自動詞文、他動詞文ともにその主語がunmarkedな格(=主格)で表わされ、他動詞文の「直接目的語」(以下「目的語」という)は、特別な格表示をうけるのが原則である。

フィンランド語の目的語は、それが分格で表示されているか否かを基準にして、2種類に分けられる。分格で表示されている目的語を「分格目的語」、分格で表示されていない目的語を「対格目的語」と呼ぶことにする。

対格目的語を、「対格」という術語を用いずに、「分格で表示されていない」という表現で規定するのは、フィンランド語の文法における「対格」の概念が、純粹に形態論的なものとはいえないからである。たとえば、(14a)においてそれぞれ「単数対格」、「複数対格」と呼ばれている *tytö-n* と *tytö-t* は、形態論的にはそれぞれ単数属格形と複数主格形である。単数属格形の *tytö-n* と複数主格形の *tytö-t* がこの環境で「対格」と呼ばれるのは、それらを人称代名詞で置き替えると、それぞれ *hän-e-t*, *hei-dä-t* という特別な形が現れるためである ((14b))。

| | | | | |
|----|-----------------------|------|------------------------|----|
| 主格 | <i>hän</i> | 彼、彼女 | <i>he</i> | 彼ら |
| 属格 | <i>hän-e-n</i> | | <i>hei-dä-n</i> | |
| 分格 | <i>hän-tä</i> | | <i>hei-tä</i> | |
| 対格 | <u><i>hän-e-t</i></u> | | <u><i>hei-dä-t</i></u> | |

〈表 1〉

「対格」と呼ばれる特別な形をもつのは、6つの人称代名詞 (*minä*, *sinä*, *hän*, *me*, *te*, *he*)と人を表わす疑問代名詞 *kuka* のみである。一般に、フィンランド語の名詞について「対格」という術語が用いられる場合には、人称代名詞の対格が現れる環境において名詞がとる形をさしているのである。この意味における名詞の対格の形を表にしてみよう。

| | 単数 | 複数 |
|----|-------------------------|-----------|
| 主格 | tyttö 女の子 | tytöt |
| 属格 | tyttö-n | tyttö-jen |
| 分格 | tyttö-ä | tyttö-jä |
| 対格 | i) tyttö-n ii) tyttö | tytöt |

〈表 2〉

名詞の対格形は、単数では、属格形または主格形と同じ形となり、複数では、主格形とおなじ形となる。単数の対格は、特別な場合を除いて、ふつうは属格形のほうが選ばれるので、主格形が選ばれる場合のことは、あとでまとめて論じることにする。

分格目的語と対格目的語のどちらが選ばれるかをきめる要因にはいくつかあり、個々の場合を検討してみると、そのうちのどれかひとつの要因が優勢であると考えられることもけっして少なくはない。分格目的語と対格目的語の使い分けをめぐる問題は、フィンランド語の文法でもっとも核心的なトピックのひとつである。

もっとも重要な要因は、文が否定文であるか否かという点である。というのは、以下に述べる分格目的語と対格目的語の区別が可能なのは、一般に肯定文の場合に限られるからである。これは、否定文では、目的語が一樣に分格で表示されてしまうためである。この現象には後に改めてふれることにして、しばらくは肯定文に議論を限定する。

目的語の格表示の問題にとりかかるまえに、名詞を、その表わす対象の性質によって大きく2つのクラスに分けておこう。1つは、その表わす対象が、ふつう個数を数えられるような個体として認識される名詞で、これを便宜上「個体名詞」と呼ぶことにする。たとえば、kirja「本」、auto「自動車」、tyttö「女の子」、karhu「熊」などはこれにあたる。第2のタイプは、その表わす対象が、ふつう個体として認識されるような固有の形をもっていない名詞で、これを「非個体名詞」と呼ぶことにする。たとえば、maito「牛乳」、lumi「雪」、aika「時間」、maa「土地」などはこれにあたる。

目的語の格表示を考える場合には、目的語が表わしている対象の性質に注目する必要がある。ここで、「目的語の表わす対象の性質」というのは、フィンランド語の文法で「分割可能性」(jaollisuus)と呼ばれている概念のことである。対象が分割可能であるとは、それが、その一部を全体から切り離して取り出しても、その部分にたいして、全体と同じ「名前」を用いることができるような性質をもっていることである。この定義に従えば非

個体名詞が表わしている対象は、通常分割可能である。他方、個体名詞の場合は、それが単数形ならば、その表わしている対象は、通常分割不可能である。kirja「本」は、1冊の本をその全体性において認識した時に用いられる名前であって、たとえば、それを半分に切ってしまったとすれば、もはや「本」としての性質は失われてしまう。これに対して、個体名詞でも、複数形の場合は事情が違う。tytö-t「女の子たち」(tyttö「女の子」の複数)は、複数の女の子からなる集合を表わし、その集合の部分集合をとると、日常的な推論によるかぎり、やはり複数の女の子からなる集合が得られるからである。つまり、分割可能性という点で、個体名詞の複数形の表わす対象は、非個体名詞の表わしている対象に通じる性質をもっていることがわかる。以下の議論では、まず、分割不可能な対象を表わす目的語（「分割不可能な目的語」と略す）、すなわち、目的語が個体名詞の単数形である場合から検討を始めることにしよう。

分格目的語か対格目的語かが決まる要因のひとつに、動詞の表わす行為がresultativeであるか否かという点がある。対格目的語が用いられるのは、resultativeな行為を表わす動詞の場合である。tappaa「殺す」、menettää「失う」、hylätä「拒絶する」、lähetää「送る」などの動詞は、ふつう対格目的語をとる動詞である[(15a)]。一方、pelätä「(～が)怖い」、odottaa「待つ」、rakastaa「愛する」、ajatella「(～のことを)思う」などの動詞の目的語は、通常分格目的語である[(15b)]。

しかし、動詞によっては、resultativeな行為を表わしているかどうか、逆に目的語の形から決まる場合もある。(16a)において、分格目的語を用いるならば、単に獲物をねらって撃ったという事実が述べられるだけであるのに対し、対格目的語を用いるならば、獲物を撃ち止めたということが表わされる。また、動詞によっては、分格目的語によって英語の進行形に相当する意味が表わされ、対格目的語によって、完了形に近い意味が表わされる。たとえば、(16b)で分格目的語を用いると、「本を書く」という行為が現在継続中であることを表わすのに対し、対格目的語を用いると、「本を書く」という行為が現在進行中かどうかを問題にするのではなく、「本を書く」という行為がいずれ完結して、結果を生む(本が書き上げられる)ことをあらわす。この対比は、(16c)のように、過去形においてより鮮明である。すなわち、分格目的語は、本が書き上がったか否かにふれないが、対格目的語の場合は、すでに本が書き上がっていることになるのである。

分格目的語となるか対格目的語となるかが、目的語の表わす対象の性質によって決まる場合がある。ostaa「買う」、myydä「売る」のような動詞の場合、目的語が分割不可能(個体名詞の単数形)であれば、対格目的語となり[(17a)]、分割可能(非個体名詞)で

あれば、ふつう分格目的語となる[(17b)]。

分割可能な目的語が対格になることもある。目的語の表わす対象がdefiniteな場合である。この現象は、目的語が個体名詞の複数形であるときに、とりわけはっきりと観察される。たとえば、(18a)において対格目的語を選べば、なんらかの仕方で特定できる女の子の集団(たとえば、ある場所にいた女の子たち)を残らず殺したことになるのに対し、分格目的語を選ぶと、殺された女の子の集団が特定されずに、殺された女の子が複数であったことをあらわすことになる。同様に、(18b)で対格目的語を選べば、話題になっている本の集まりを残らず買うことになるが、分格目的語を選ぶと、本を何冊か買うことを表わすのみである。これと平行した現象は、非個体名詞の場合でもみられる。たとえば、(19a)のような文でも、対格目的語が用いられることがあり、その場合は、たとえば、注文したコップ一杯の牛乳とか、冷蔵庫の中にあった牛乳とかのような、特定できる牛乳を全部飲んでしまったというような意味になる。また、(19b)では、分格目的語を用いると、単に「土地を売った」だけであるが、対格目的語を用いると、あるひとまとまりの土地全体が売られたことになる。

すでに簡単にふれたように、対格目的語と分格目的語の対立が可能にする以上のような微妙な意味の区別は、目的語が一様に分格となる否定文ではすべて失われる[(20a), (20b) (20c)]。

(14) a) Pekka kutsu-i tytö-n/tytö-t päivällise-lle.

ペッカ(主格) 招待する(3人称単数過去) 女の子(単数対格/複数対格) デイナー(向格)

「ペッカは女の子を/女の子たちをディナーに招待した」

b) Pekka kutsu-i häne-t/heidä-t päivällise-lle.

ペッカ(主格) 招待する(3人称単数過去) 彼[彼女](対格)/彼女ら(対格) デイナー(向格)

「ペッカは彼女を/彼女たちをディナーに招待した」

(15) a) Pekka tappo-i/menett-i tytö-n.

ペッカ(主格) 殺す(3人称単数過去)/失う(3人称単数過去) 女の子(単数対格)

「ペッカは女の子を殺した/失った」

b) Pekka pelkä-si/odott-i tyttö-ä.

ペッカ(主格) こわがる(3人称単数過去)/待つ(3人称単数過去) 女の子(単数分格)

「ペッカは女の子をこわがった/待った」

- (16) a) Pekka ampu-i karhu-a/karhu-n.
 ベッカ(主格) 撃つ(3人称単数過去) 熊(単数分格/単数対格)
 「ベッカは熊を(ねらって)撃った/撃ちとめた」
- b) Liisa kirjoitta-a kirja-a/kirja-n.
 リーサ(主格) 書く(3人称単数現在) 本(単数分格/単数対格)
 「リーサは本を書いている/書く」
- c) Liisa kirjoitt-i kirja-a/kirja-n.
 リーサ(主格) 書く(3人称単数過去) 本(単数分格/単数対格)
 「リーサは本を書いていた/書いた」
- (17) a) Pekka osta-a/ost-i auto-n.
 ベッカ(主格) 買う(3人称単数現在/過去) 自動車(単数対格) 「ベッカは車を買う/買った」
- b) Pekka osta-a/ost-i maito-a.
 ベッカ(主格) 買う(3人称単数現在/過去) 牛乳(単数分格) 「ベッカは牛乳を買う/買った」
- (18) a) Liisa tappo-i tyttö-jä/tyttö-t.
 リーサ(主格) 殺す(3人称単数過去) 女の子たち(複数分格/複数対格)
 「リーサは女の子たちを(何人か/残らず)殺した」
- b) Liisa osta-a kirjo-ja/kirja-t.
 リーサ(主格) 買う(3人称単数現在) 本(複数分格/複数対格)
 「リーサは本を(何冊か/残らず)買う」
- (19) a) Pekka jo-i maito-a/maido-n.
 ベッカ(主格) 飲む(3人称単数過去) 牛乳(単数分格/単数対格)
 「ベッカは牛乳を飲んだ/その牛乳を(残らず)飲んでしまった」
- b) Pekka my-i maa-ta/maa-n.
 ベッカ(主格) 売る(3人称単数過去) 土地(単数分格/単数主格)
 「ベッカは土地を売った/その土地を売り払った」
- (20) a) Pekka ei kirjoita kirja-a.
 ベッカ(主格) 書かない(3人称単数現在) 本(単数分格)
 「ベッカは本を書いていない/書かない」
- b) Pekka ei ostanut kirja-a/kirjo-ja.
 ベッカ(主格) 買わない(3人称単数過去) 本(単数分格/複数分格) 「ベッカは本を買わなかった」

- c) Pekka ei juonut maito-a.
 ペッカ(主格) 飲まない(3人称単数過去) 牛乳(単数分格) 「ペッカは牛乳を飲まなかった」

目的語の格表示を一層複雑にしているのは、対格目的語が単数名詞の場合、環境によっては、単数属格形のかわりに単数主格形で表わされることである。本稿では、単数主格形の対格目的語が用いられる環境をいちいち列挙することはやめ、そのような環境のうちでもっとも典型的と考えられる受動文[(21b)], 「属格主語構文」[(22b)], 命令文[(23b)] の3つをあげるにとどめる。複数名詞および人称代名詞の場合には、単数名詞の場合に見られるような対格目的語の形の交替は起こらない[(24), (25), (26), (27), (28), (29)], 尚、分格目的語は、どのような統語的環境でも分格形で表わされる。

- (21) a) He osta-vat kirja-n huomenna. [単数属格形]
 彼ら(主格) 買う(3人称複数現在) 本(単数対格) あす 「彼らは本をあす買う」

- b) Kirja oste-taan huomenna. [単数主格形]
 本(単数対格) 買う(受動現在) あす 「本はあす買われる」

- (22) a) Minä osta-n kirja-n. [単数属格形]
 わたし(主格) 買う(1人称単数現在) 本(単数対格) 「わたしは本を買う」

- b) Minu-n täyty-y osta-a kirja. [単数主格形]
 わたし(属格) ねばならない(3人称単数現在) 買う(不定詞) 本(単数対格)
 「わたしは本を買わなければならない」

- (23) a) Sinä osta-t kirja-n. [単数主格形]
 あなた(主格) 買う(2人称単数現在) 本(単数対格) 「あなたは本を買う」

- b) Osta kirja! [単数主格形]
 買いなさい(2人称単数) 本(単数対格) 「本を買いなさい」

- (24) a) He osta-vat kirja-t huomenna.
 彼ら(主格) 買う(3人称複数現在) 本(複数対格) あす
 「彼らは(それらの)本をあす買う」

- b) Kirja-t oste-taan huomenna.
 本(複数対格) 買う(受動現在) あす 「(それらの)本はあす買われる」

- (25) a) Minä osta-n kirja-t.
わたし(主格) 買う(1人称単数現在) 本(複数対格) 「わたしは(それらの)本を買う」
- b) Minu-n täyty-y osta-a kirja-t.
わたし(属格) ねばならない(3人称単数現在) 買う(不定詞) 本(複数対格)
「わたしは(それらの)本を買わなければならない」
- (26) a) Sinä osta-t kirja-t.
あなた(主格) 買う(2人称単数現在) 本(複数対格) 「あなたは(それらの)本を買う」
- b) Osta kirja-t!
買いなさい(2人称単数) 本(複数対格) 「(それらの)本を買いなさい」
- (27) a) He kutsu-vat sinu-t päivällise-lle.
彼(主格) 招待する(3人称複数現在) あなた(対格) ディナー(向格)
「彼らはあなたをディナーに招待する」
- b) Sinu-t kutsu-taan päivällise-lle.
あなた(対格) 招待する(受動現在) ディナー(向格)
「あなたはディナーに招待される」
- (28) a) Minä kutsu-n sinu-t päivällise-lle.
わたし(主格) 招待する(1人称単数現在) あなた(対格) ディナー(向格)
「わたしはあなたをディナーに招待する」
- b) Minu-n täyty-y kutsu-a sinu-t päivällise-lle.
わたし(属格) ねばならない(3人称単数現在) 招待する(不定詞) あなた(対格) ディナー(向格)
「わたしはあなたをディナーに招待しなければならない」
- (29) a) Sinä kutsu-t minu-t päivällise-lle.
あなた(主格) 招待する(2人称単数現在) わたし(対格) ディナー(向格)
「あなたはわたしをディナーに招待する」
- b) Kutsu minu-t päivällise-lle!
招待しなさい(2人称単数) わたし(対格) ディナー(向格)
「わたしをディナーに招待してください」

4. 存在文と普通文

存在文 (existential sentence) は、フィンランド語のシンタクスを特徴づける構文のひとつである。存在文は、通常「存在場所 + olla動詞 + 存在するもの」という構造をしている。第2節でふれた所有文は、「存在場所」がたまたま人であるような特別な存在文であるとみなすことができる [(30a), (30b), (30c)], 以下で「存在文」という場合には、一般に所有文も含まれる。

フィンランド語の文法では、自動詞文を存在文と普通文 (normal sentence) とに区分する。説明の便宜上、存在文で存在するものを表わす名詞句を、存在文の「主語」と呼ぶことにする。存在文は普通文と比べて、次のような特徴をもっている。

- i) 普通文の語順は、通常「主語 - 動詞 - 場所表現」となる [(31b), (32b), (33b)] に対して、存在文は、通常「場所表現 - 動詞 - 主語」という語順である [(31a), (32a), (33a)]。
- ii) 普通文の主語が常に主格であらわれるのに対して、存在文では、複数名詞または非個体名詞が主語の場合には、主語は通常分格形であらわれる [(32b), (33b)]。
- iii) 普通文では、主語と動詞が数 (および人称) において一致する [(35b), (36b), (37b)] が、存在文では、動詞は常に3人称単数形のみである [(34a), (34b), (34c)]。
- iv) 存在文の主語は、ふつう意味的に indefinite であるが、普通文の主語は、definite であるのが普通である。

存在文に用いられる自動詞は、olla動詞 (英語のbe動詞にあたる) に限られるわけではない。ある文法家は、存在文をつくる自動詞を 270以上も列挙している。たとえば、次の様な動詞が存在文を作ることのできる自動詞である。

| | | | |
|-----------|--------------|---------|--------------|
| asua | 「住む」 | liikkua | 「動きまわる」 |
| hävitä | 「いなくなる」 | lähteä | 「立ち去る」 |
| ilmestyä | 「出現する」 | mahtua | 「(容器などに)収まる」 |
| jääda | 「残る」 | maata | 「横たわる」 |
| kasaantua | 「積もる」 | näkyä | 「見える」 |
| kasvaa | 「(植物が)生えている」 | piillä | 「隠れている」 |
| kadota | 「見えなくなる」 | puuttua | 「足りない」 |
| kulkea | 「歩きまわる」 | syntyä | 「生まれる」 |
| kulua | 「費やされる」 | tulla | 「やってくる」 |
| kuolla | 「死ぬ」 | virrata | 「流れる」 |

〈表3〉

これらの動詞の中には、一見すると「存在」とは無関係に思われる動詞もあるが、これらの動詞の用いられている文を検討してみると、いずれも広い意味で「存在」、「出現（存在の始まり）」、「消滅（存在の終わり）」の様々なあり方を表わしているとみなすことができる。存在文という名称は、このタイプの構文の典型である olla 動詞が作る文の意味にもとづくものではあるが、以上のような一般的な特徴をもつ自動詞文の総称としても妥当なものといえよう。olla動詞以外の自動詞のつくる存在文の例として、(34)の各文を対応する普通文(35),(36),(37)と比較されたい。

フィンランド語の存在文と呼ばれる自動詞文が、類型論的な興味をひくのは、存在文の「主語」の格表示に、他動詞文の目的語の格表示と平行的なところがあるからである。すでに第3節でふれたように、単数の対格目的語が単数属格形のかわりに単数主格形で表示される場合がある[(21b),(22b),(23b)]が、このような環境における目的語の格表示の体系は、存在文の主語の格表示の体系と原理的に同じである。(38),(39),(40)は、それぞれ個体名詞の単数、個体名詞の複数、非個体名詞の場合を示す。(41),(42),(43)は、それぞれ(38),(39),(40)に対応する否定文の例である。

(30) a) Minu-lla on kirja. [所有文]

わたし(接格) ある(3人称単数現在) 本(単数主格)

「わたしには本がある(わたしは本をもっている)」

b) Pöydä-llä on kirja. [存在文]

机(接格) ある(3人称単数現在) 本(単数主格)

「机の上に本がある」

c) Lauku-ssa on kirja. [存在文]

カバン(内格) ある(3人称単数現在) 本(単数主格)

「カバンの中に本がある」

(31) a) Pöydä-llä on kirja. (=30b) [存在文]

机(接格) ある(3人称単数現在) 本(単数主格)

「机の上に本がある」

b) Kirja on pöydä-llä. [普通文]

本(単数主格) ある(3人称単数現在) 机(接格)

「(その)本は机の上にある」

(32) a) Lasi-ssa on maito-a. [存在文]

コップ(内格) ある(3人称単数現在) 牛乳(単数分格)

「コップの中に牛乳がある」

b) Maito on lasi-ssa. [普通文]

牛乳(単数主格) ある(3人称単数現在) コップ(内格)

「(その)牛乳はコップの中にある」

(33) a) Kahvila-ssa on tyttö-jä. [存在文]
喫茶店(内格) ある(3人体単数現在) 女の子(複数分格) 「喫茶店に女の子たちがいる」

b) Tyttö-t ovat kahvila-ssa. [普通文]
女の子(複数主格) ある(3人体単数現在) 喫茶店(単数内格)
「(その)女の子たちは喫茶店にいる」

(34) a) Kahvila-ssa istu-u tyttö/tyttö-jä.
喫茶店(内格) すわっている(3人体単数現在) 女の子(単数主格/複数分格)
「喫茶店に女の子が/女の子たちがすわっている」

b) Kahvila-an tule-e tyttö/tyttö-jä.
喫茶店(入格) やってくる(3人体単数現在) 女の子(単数主格/複数分格)
「喫茶店へ女の子が/女の子たちがやってくる」

c) Kahvila-sta lähte-e tyttö/tyttö-jä.
喫茶店(出格) 立ち去る(3人体単数現在) 女の子(単数主格/複数分格)
「喫茶店から女の子が/女の子たちが出ていく」

(35) a) Tyttö istu-u kahvila-ssa.
女の子(単数主格) すわっている(3人体単数現在) 喫茶店(単数内格)
「(その)女の子は喫茶店にすわっている」

b) Tyttö-t istu-vat kahvila-ssa.
女の子(複数主格) すわっている(3人体複数現在) 喫茶店(内格)
「(その)女の子たちは喫茶店にすわっている」

(36) a) Tyttö tule-e kahvila-an.
女の子(単数主格) やってくる(3人体単数現在) 喫茶店(入格)
「(その)女の子は喫茶店へやってくる」

b) Tyttö-t tule-vat kahvila-an.
女の子(複数主格) やってくる(3人体複数現在) 喫茶店(入格)
「(その)女の子たちは喫茶店へやってくる」

(37) a) Tyttö lähte-e kahvila-sta.
女の子(単数主格) 立ち去る(3人体単数現在) 喫茶店(出格)
「(その)女の子は喫茶店から出ていく」

- b) Tyttö-t lähte-vät kahvila-sta.
 女の子(複数主格) 立ち去る(3人称複数現在) 喫茶店(出格)
 「(その)女の子たちは喫茶店から出ていく」
- (38) a) Minu-n täyty-y osta-a kirja.
 わたし(属格) ねばならない(3人称単数現在) 買う(不定詞) 本(単数対格[=単数主格形])
 「わたしは本を買わなければならない」
- b) Pöytä-llä on kirja.
 机(接格) ある(3人称単数現在) 本(単数主格) 「机の上に本がある」
- (39) a) Kirjakaupa-sta oste-taan kirjo-ja.
 本屋(出格) 買う(受動現在) 本(複数分格) 「本屋からは本を買う」
- b) Kirjakaupa-ssa on kirjo-ja.
 本屋(内格) ある(3人称単数現在) 本(複数分格) 「本屋には本がある」
- (40) a) Osta maito-a!
 買いなさい(2人称単数) 牛乳(単数分格) 「牛乳を買いなさい」
- b) Lasi-ssa on maito-a.
 コップ(内格) ある(3人称単数現在) 牛乳(単数分格) 「コップの中に牛乳がある」
- (41) a) Sinu-lle ei anne-ta kirja-a.
 あなた(向格) 与えない(受動現在) 本(単数分格) 「あなたには本をあげない」
- b) Pöytä-llä ei ole kirja-a.
 机(接格) ない(3人称単数現在) 本(単数分格) 「机の上に本はない」
- (42) a) Maitokaupa-sta ei oste-ta kirjo-ja.
 牛乳屋(出格) 買わない(受動現在) 本(複数分格) 「牛乳屋から本は買わない」
- b) Maitokaupa-ssa ei ole kirjo-ja.
 牛乳屋(内格) ない(3人称単数現在) 本(複数分格) 「牛乳屋に本はない」
- (43) a) Älä osta maitoa!
 買わないで(2人称単数) 牛乳(単数分格) 「牛乳を買わないで」
- b) Lasi-ssa ei ole maito-a.
 コップ(内格) ない(3人称単数現在) 牛乳(単数分格) 「コップの中に牛乳はない」

他動詞文の目的語と自動詞文の主語が同じ格表示を受け、他動詞文の主語と格表示のうえで対立するのは、いわゆる能格的な体系である。上に述べたフィンランド語の存在文の主語に関する事実は、能格的な原理の関与をうかがわせる。ただし、能格言語では、一般に、他動詞文の目的語と自動詞文の主語が、他動詞文の主語に対して unmarked な格表示を受ける。これに対して、フィンランド語では、unmarked の格表示を受けるのは、他動詞文（および普通文と呼ばれる自動詞文）の主語のほうである。格表示の markedness の関係が能格言語の場合と逆になっているわけである。

5. 受動文

フィンランド語で受動文 (passive) と呼ばれている構文には、次のような特徴がある。

- i) 受動文では、動作主が明示されない。ただし、受動文の動作主としては、常に人間が想定されている。したがって、受動文に対して、me「わたしたち」、he「彼ら」あるいは、ihmiset「人々」のような、複数の人を表わす一般的な表現を主語とした能動文を対応させることができる場合が多い [(44a), (45a), (53a)]。
- ii) 受動文では、能動文の目的語に相当する名詞句が目的語の格表示を受ける [(44b), (46b), (47b), (48b), (49b)]。ただし、単数の対格目的語は、受動文では、単数属格形ではなく、単数主格形で表わされる [(45b)]。
- iii) 受動文では、動詞が受動形（不定人称形ともいう）と呼ばれる特別な形になる。受動形は、いわゆる他動詞 [(44b), (45b), (48b), (49b)] ばかりでなく、原則として全ての動詞にある形である [(52b), (53b)]。

受動文のもっともふつうの語順では、動詞が第2番目の構成素となる。文頭におかれる成分は、目的語である場合が多く見られる [(50b)] が、それ以外の成分であることも少なくない [(51b)]。目的語が文頭におかれることが比較的多いのは、目的語が主語に次いで主題になりやすい文成分であるためと考えられる。他動詞文の受動は、英語や日本語に訳す場合、多く受動文として訳すことができるが、「人々は（わたしたちは）～する」の意味となる自動詞文の受動は、英語や日本語では受動文にならないことが多い [(52b), (53b)]。

フィンランド語の受動文は、本来動作主を明示しない構文なので、動作主を表わす必要がある場合には用いることができない。フィンランド語で動作主を明示した受動文の役割を果たすのは、「目的語－動詞－主語」という語順の能動文である [(54b)]。また、(54c)のように、動作主分詞と呼ばれる動詞の分詞形を動作主を表わす名詞句の属格形とともに

用いて、受動に相当する意味を表わすこともある。

(44) a) Me kutsu-mme häne-t päivällise-lle. [人称代名詞]

わたしたち(主格) 招待する(1人称複数現在) 彼[彼女](対格) デイナー(向格)

「わたしたちは彼をディナーに招待する」

b) Häne-t kutsu-taan päivällise-lle.

彼[彼女](対格) 招待する(受動現在) デイナー(向格) 「彼はディナーに招待される」

(45) a) He osta-vat kirja-n huomenna. [個体名詞の単数]

彼ら(主格) 買う(3人称複数現在) 本(単数対格) あす 「彼らはあす本を買う」

b) Kirja oste-taan huomenna.

本(単数対格) 買う(受動現在) あす 「本はあす買われる」

(46) a) He osta-vat maito-a huomenna. [非個体名詞]

彼ら(主格) 買う(3人称複数現在) 牛乳(単数分格) あす 「彼らはあす牛乳を買う」

b) Maito-a oste-taan huomenna.

牛乳(単数分格) 買う(受動現在) あす 「牛乳はあす買われる」

(47) a) Me osta-mme kirjo-ja/kirja-t huomenna. [個体名詞の複数]

わたしたち(主格) 買う(1人称複数現在) 本(複数分格/複数対格) あす

「わたしたちは本を(何冊か) / (それらの)本をあす買う」

b) Kirjo-ja/Kirja-t oste-taan huomenna.

本(複数分格/複数対格) 買う(受動現在) あす 「本はあす買われる」

(48) a) He eivät osta kirja-a/kirjo-ja huomenna.

彼ら(主格) 買わない(3人称複数現在) 本(単数分格/複数分格) あす

「彼らは本をあす買わない」

b) Kirja-a/Kirjo-ja ei oste-ta huomenna.

本(単数分格/複数分格) 買わない(受動現在) あす 「本はあす買われぬ」

(49) a) Me emme kutsu hän-tä päivällise-lle.

わたしたち(主格) 招待しない(1人称複数現在) 彼[彼女](分格) デイナー(向格)

「わたしたちは彼をディナーに招待しない」

b) Hän-tä ei kutsu-ta päivällise-lle.
彼[彼女](分格) 招待しない(受動現在) デイナー(向格) 「彼はディナーに招待されない」

(50) a) Me anna-mme kirja-n häne-lle.
わたしたち(主格) 与える(1人称複数現在) 本(単数対格) 彼[彼女](向格)
「わたしたちは本を彼にあげる」

b) Kirja anne-taan häne-lle.
本(単数対格) 与える(受動現在) 彼[彼女](向格) 「本は彼に与えられる」

(51) a) Me anna-mme häne-lle kirja-n.
わたしたち(主格) 与える(1人称複数現在) 彼[彼女](向格) 本(単数対格)
「わたしたちは彼に本をあげる」

b) Häne-lle anne-taan kirja.
彼[彼女](向格) 与える(受動現在) 本(単数対格) 「彼に本が与えられる」

(52) a) Me mene-mme huomenna Helsinki-in.
わたしたち(主格) 行く(1人称複数現在) あす ヘルシンキ(入格)
「わたしたちはあすヘルシンキに行く」

b) Huomenna men-nään Helsinki-in.
あす 行く(受動現在) ヘルシンキ(入格) 「あすヘルシンキに行く」

(53) a) Tokio-ssa ihmise-t asu-vat tiheästi.
東京(内格) 人(複数主格) 住む(3人称複数現在) 密集して
「東京では人々が密集して住んでいる」

b) Tokio-ssa asu-taan tiheästi.
東京(内格) 住む(受動現在) 密集して 「東京では密集して住んでいる」

(54) a) Professori Joki on koostanut sanakirja-n.
教授 ヨキ 編集する(3人称単数現在完了) 辞書(単数対格)
「ヨキ教授は辞書を編集した」

b) Sanakirja-n on koostanut professori Joki.
辞書(単数対格) 編集する(3人称単数現在完了) 教授 ヨキ
「(その)辞書はヨキ教授が編集した」

- c) Sanakirja on professori Joe-n koosta-ma.
 辞書(単数主格) である(3人称単数現在) 教授 ヨキ(属格) 編集する(動作主分詞)
 「辞書はヨキ教授の編集したものである」

6. 使役文

フィンランド語には、使役を表わす一連の派生動詞がある。たとえば、leipo-a 「(パンなどを) 焼く」に対する leivo-tta-a 「焼かせる」[(55b)] や、laula-a 「歌う」に対する laula-tta-a 「歌わせる」[(56b)] がそれである。このような派生動詞を、「使役動詞」と呼び、使役動詞のもとになっている動詞を「埋め込み動詞」と呼ぶことにする。

使役動詞を用いた使役文では、埋め込み動詞が自動詞なら、使役の対象(causee)は目的語の格表示をうける[(56b)]。これに対し、埋め込み動詞が他動詞の場合には、埋め込み動詞の目的語にあたる名詞句が目的語の格表示を受け、使役の対象は接格で表わされる[(55b)]。使役の対象が目的語の格表示をうける使役文の場合、さらにその使役動詞を埋め込み動詞とする使役動詞が作られることがある。たとえば、使役文(56b)を埋め込んだ使役文(56c)は、「リーサが生徒たちを歌わせる」という使役関係を含んだ事態を、校長がリーサに働きかけることによって生じさせるという、2重の使役関係を表わすことになる。このような2重の使役関係を表わす使役動詞は、一般に、使役動詞を作る派生接辞を2つ含んでいる(laula-a 「歌う」→ laula-tta-a 「歌わせる」→ laula-tu-tta-a 「歌わせる」)。また、埋め込まれた使役文の使役の主体(causer)は、新しい使役関係に対しては使役の対象の役割を果たし、したがって接格で表示される[(56c)]。ただし、2重の使役関係を表わす構文を受け入れないネイティブスピーカーもいる。

使役はまた、補助動詞を用いて分析的に表わすこともできる。使役を表わす補助動詞には、antaa 「与える」[(57b)]、panna 「置く」[(58a)]、saada 「得る」[(58b)]がある。このうち、antaa は許容的(permissive)な使役を表わし、第1不定詞とともにもちいられる。また、使役の対象を表わす名詞句は属格形になる。panna と saada は、第3不定詞の入格形とともに用いられ、ふつう許容的意味はもたない。第3不定詞の入格形を用いた構文をつくる動詞は数多くあり、その中には、動詞の語彙的な意味のために使役文に相当する(58c)のような例もある。この構文では、使役の対象を表わす名詞句は使役を表わす動詞の目的語として現れる。

分析的な使役構文との関連では、第3不定詞の出格形を用いて、妨害をあらわす動詞があることに注目しておきたい[(59)]。

- (55) a) Liisa leipo-o kaku-n.
 リーサ(主格) 焼く(3人称単数現在) ケーキ(単数対格) 「リーサはケーキを焼く」
- b) Äiti leivo-tta-a Liisa-lla kaku-n.
 母親(主格) 焼かせる(3人称単数現在) リーサ(接格) ケーキ(単数対格)
 「母親はリーサにケーキを焼かせる」
- (56) a) Oppilaa-t laula-vat.
 生徒(複数主格) 歌う(3人称複数現在) 「生徒たちは歌う」
- b) Liisa laula-tta-a oppila-ita.
 リーサ(主格) 歌わせる(3人称単数現在) 生徒(複数分格) 「リーサは生徒たちを歌わせる」
- c) Rehtori laula-tu-tta-a Liisa-lla oppila-ita.
 校長(主格) 歌わせる(3人称単数現在) リーサ(接格) 生徒(複数分格)
 「校長はリーサに命じて生徒たちを歌わせる」
- (57) a) Lauri laula-a.
 ラウリ(主格) 歌う(3人称単数現在) 「ラウリが歌う」
- b) Laura anta-a Lauri-n laula-a.
 ラウラ(主格) 与える(3人称単数現在) ラウリ(属格) 歌う(不定詞)
 「ラウラはラウリに歌わせた」
- (58) a) Laura pane-e Lauri-n laula-ma-an.
 ラウラ(主格) 置く(3人称単数現在) ラウリ(対格) 歌う(第3不定詞入格)
 「ラウラはラウリを歌うようにさせる」
- b) Laura saa Lauri-n laula-ma-an.
 ラウラ(主格) 得る(3人称単数現在) ラウリ(対格) 歌う(第3不定詞入格)
 「ラウラはラウリを歌うようにさせる」
- c) Laura pakotta-a Lauri-n laula-ma-an.
 ラウラ(主格) 強制する(3人称単数現在) ラウリ(対格) 歌う(第3不定詞入格)
 「ラウラはラウリに歌うよう強いる」
- (59) Laura estä-ä Lauri-a laula-ma-sta.
 ラウラ(主格) 妨げる(3人称単数現在) ラウリ(分格) 歌う(第3不定詞出格)
 「ラウラはラウリが歌うのを妨げる」

7. 関係節

フィンランド語の関係節は、主名詞に対する相対的位置によって、prenominal なタイプと postnominal なタイプとに分けられる。本稿では、それぞれを「前置関係節」、「後置関係節」と呼ぶことにする。

後置関係節は、関係代名詞を用いて作られる構文で、関係節化をうける名詞句の格表示は関係代名詞によって受け継がれる。このタイプの関係節では、述語動詞は finite な形で現れる。

前置関係節は、動詞の分詞形を用いて作られる。関係節化をうける名詞句は埋め込み文から消去されるが、その名詞句の埋め込み文における統語的機能は、関係節の述語動詞の形としてどの分詞形が選ばれるかを定める基準となる。

後置関係節には、関係節化できる名詞句の位置に関する制限がほとんどないが、前置関係節が関係節化できる名詞句は、主語[(60)]と目的語[(61b), (62b), (63b)]のみである。目的語の関係節化の場合、後置関係節では、対格目的語[(61a), (63a)]と分格目的語[(62a)]が、関係代名詞に対しておこなわれる格表示によって区別されるが、前置関係節はこれを区別できない[(61b), (62b)]。しかしながら、埋め込み文が能動文であるか[(61b), (62b)]、それとも受動文であるか[(63b)]を、分詞の種類によって区別することはできる。

フィンランド語では、いわゆる「間接目的語」というカテゴリーをたてることのできる(ないしは、たてる必要がある)かどうか極めて疑わしい。「与格名詞句」にあたる向格名詞句[(64)]は、「主要斜格名詞句」(Major Oblique Case NP)の中に含めて扱ったほうがよい。以上の2つの名詞句の位置は、いずれも後置関係節による関係節化が可能である[(64b), (65b)]。さらに、属格名詞句も後置関係節による関係節化が可能である[(66b)]。

比較の基準を表わす名詞句には、2つの場合がある。1つは、形容詞の比較級に先行する分格名詞句で、この場合には、後置関係節による関係節化が可能である[(67b)]、もう1つは、接続詞 *kuin* に先立たれる名詞句の場合[(68)]で、この場合は関係節化を受けられない。

関係節には、このほかに、(69)のような相関構文もあるが、頻度は余り高くない。フィンランド語では、制限的關係節と非制限的關係節を形の上で区別しない。非制限的關係節は、人称代名詞を先行詞とすることができる[(70)]。

- (60) Poika ost-i kirja-n.
 男の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格) 「男の子は本を買った」
- a) poika, [joka ost-i kirja-n]
 男の子(単数主格) 関係代名詞(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格) 「本を買った男の子」
- b) [kirja-n osta-nut] poika
 本(単数対格) 買う(能動過去分詞) 男の子(単数主格) 「同上」
- (61) Tyttö ost-i kirja-n.
 女の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格) 「女の子は本を買った」
- a) kirja, [jo-n-ka tyttö ost-i]
 本(単数主格) 関係代名詞(単数対格) 女の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 「女の子が買った本」
- b) [tyttö-n osta-ma] kirja
 女の子(単数属格) 買う(動作主分詞) 本(単数主格) 「同上」
- (62) Tyttö ost-i maito-a.
 女の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 牛乳(単数対格) 「女の子は牛乳を買った」
- a) maito, [jo-ta tyttö ost-i]
 牛乳(単数主格) 関係代名詞(単数対格) 女の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 「女の子が買った牛乳」
- b) [tyttö-n osta-ma] maito
 女の子(単数属格) 買う(動作主分詞) 牛乳(単数主格) 「同上」
- (63) Kirja oste-ttiin kirjakaupa-sta.
 本(単数主格) 買う(受動過去) 本屋(出格) 「本は本屋から買われた」
- a) kirja, [joka oste-ttiin kirjakaupa-sta]
 本(単数主格) 関係代名詞(単数対格) 買う(受動過去) 本屋(出格)
 「本屋から買われた本」
- b) [kirjakaupa-sta oste-ttu] kirja
 本屋(出格) 買う(受動過去分詞) 本(単数主格) 「同上」
- (64) a) Poika ost-i kirja-n tytö-lle.
 男の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格) 女の子(向格)
 「男の子は女の子に本を買ってあげた」

- b) tyttö, [jo-lle poika ost-i kirja-n]
 女の子(単数主格) 関係代名詞(向格) 男の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格)
 「男の子が本を買ってあげた女の子」
- (65) a) Poika ost-i kirja-n kirjakaupa-sta.
 男の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格) 本屋(出格)
 「男の子は本を本屋から買った」
- b) kirjakauppa, [jo-sta poika ost-i kirja-n]
 本屋(単数主格) 関係代名詞(出格) 男の子(単数主格) 買う(3人称単数過去) 本(単数対格)
 「男の子が本を買った本屋」
- (66) a) Poika my-i tytö-n kirja-n.
 男の子(単数主格) 売る(3人称単数過去) 女の子(単数属格) 本(単数対格)
 「男の子は女の子の本を売った」
- b) tyttö, [jo-n-ka kirja-n poika my-i]
 女の子(単数主格) 関係代名詞(単数属格) 本(単数対格) 男の子(単数主格) 売る(3人称単数過去)
 「男の子が(その人の)本を売った女の子」
- (67) a) Poika on tyttö-ä pite-mpi.
 男の子(単数主格) である(3人称単数現在) 女の子(単数分格) 長い(比較級)
 「男の子は女の子より背が高い」
- b) tyttö, [jo-ta pite-mpi poika on]
 女の子(単数主格) 関係代名詞(単数分格) 長い(比較級) 男の子(単数主格) である(3人称単数現在)
 「男の子のほうが(その人より)背が高い(その)女の子」
- (68) Poika on pite-mpi kuin tyttö.
 男の子(単数主格) である(3人称単数現在) 長い(比較級) ~より 女の子(単数主格)
 「男の子は女の子より背が高い」
- (69) [Jo-lla ei ole muisti-a,] häne-llä ei ole elämä-ä.
 関係代名詞(接格) ない(3人称単数現在) 記憶(単数分格) 彼(接格) ない(3人称単数現在) 生(単数分格)
 「記憶のない人には、生もない」
- (70) Minä, [joka opiskele-n suome-a,] pidä-n sauna-sta.
 わたし(主格) 関係代名詞(単数主格) 勉強する(1人称単数現在) フィンランド語(分格) 好む(1人称単数現在) サウナ(出格)
 「フィンランド語を勉強しているわたしは、サウナが好きである」

《参考文献》

A. フィンランド語の文法構造の概観

Collinder, Björn. 1957. "Finnish." [Björn Collinder, Survey of the Uralic Languages (Stockholm: Almqvist & Wiksell), 1-132]

Fromm, Hans. 1982. Finnische Grammatik. Heidelberg: Carl Winter

Karlsson, Fred. 1983. Finnish Grammar. Helsinki: Werner Söderström

尾崎 義. 1955. 「フィンランド語」[『世界言語概説, 下』(東京: 研究社), 689-723]

B. 格表示

Heinämäki, Orvokki. 1984. "Aspect in Finnish." [Casper de Groot & Hannu Tomola, eds., Aspect Bound. A Voyage into the Realm of Germanic, Slavonic and Finno-Ugric Aspectology (Dordrecht: Foris), 153-177]

Itkonen, Terho. 1979. "Subject and object marking in Finnish: an inverted ergative system and an 'ideal' ergative sub-system." [Frans Planck, ed., Ergativity. Towards a Theory of Grammatical Relations (London: Academic Press), 79-102]

Timberlake, Alan. 1975. "The nominative object in Finnish." [Lingua 35, 201-230]